赤ちゃんの四季（67）　平成29年秋

AI時代、「声」の時代に

いま、人工知能、AIを搭載したロボット時代に突入しようとしています。そのセンサーとして、視覚機能とともに、音声認識機能がそのキーです。すでに使われているスマホにも音声認識機能がついています。ことばで問いかけると、道案内をはじめ、いろんな検索結果を声で答えてくれます。日本語で話しかけると、英語や中国語、韓国語に翻訳し、音声で返ってきます。

ヒトの聴覚機能は、視覚よりも早くから発達している感覚で、妊娠６か月頃の胎児にすでに備わっています。胎児は、羊水の中で母親の声や外部の音を聞いています。羊水中で聞く母親の声と、生まれてきて空気中で聞く母親の声とは違うはずですが、生まれたての新生児は、自分の母親の声と他人の声とを区別しています。

新生児は、母国語だけでなく、いろんな言語の複雑な発音を聞き分ける能力をもって生まれてきます。母国語以外の発音は聞く機会がないので、３歳までにそのための神経回路は消滅するようです。

昔スイスに旅行に行った時に、フランス語、イタリア語、ドイツ語、英語の４ヶ国語を見事に話す少年に出会ったことがあります。彼は日常的にこれらの言語を耳にする機会に恵まれていたからです。

いま、日本の小学校でも英語教育が始まっていますが、本気で英語を話せる日本人にしようとするのなら、英語の発音を認識するための回路が残っている幼児期から始めることです。発音だけのトレーニングなら、何も外国人を呼ばなくても、音声認識機能つきのロボットでネイティブの発音を耳にする機会を増やすことです。

声は、いろんな情報を相手に伝えます。目を閉じて、声を聞いているだけで、相手の喜怒哀楽や健康状態もわかります。目も相手に多くのこと語りかけますが、声は自分の意思をもっと豊かに、もっと正確に反映できます。

これからは、使う言語に関係なく、心のこもった豊かな会話をするための「声の教育」が必要でしょう。